

2016年6月30日

平成28年度6月学位授与式学長告辞

九州工業大学長 尾家祐二

本日ここに博士後期課程学位授与式を挙げるにあたり、めでたくこの佳き日を迎えられる4名の皆様に心からお祝いを申し上げます。また、この日まで皆様を暖かく見守り御支援されました御家族の皆様、並びに主指導教授の方々のお喜びもひとしおのことと拝察申し上げます。

皆さんに、はなむけの言葉を述べる前に、4月に起きました平成28年熊本地震のことについて触れたいと思います。まず、この地震で被害にあわれました皆様に、心よりお見舞い申し上げます。本学は、幸いにも、直接的な被害はありませんでしたが、これまでの報告では、35名の学生の実家が全壊、半壊の被害に遭っています。本学としましては被害に遭った学生への経済的支援、また本学の学外研修施設「長陽山荘」があります被災地の南阿蘇村役場へ飲料水の提供と共に慰問を行いました。さらに学術機関としては、各種災害調査委員会等の一員として、本学の教員が協力させて頂いておりますが、引き続き、大学として役割を果たしていきたいと思っております。

このような災害の際に感じることは、その被害に遭われた方々の思いを理解することは到底困難であろうということです。したがって、理解するというよりは、受けとめる、受け入れるために想像し、共感することが大切ではないかと思っておりますし、新たな知識と経験で、想像力及び共感力を強く、豊かにしていきたいと思っております。

さて、本日学位を取得されました皆様は、これまでに、多くのご苦勞を経験されたことと思っておりますし、喜びも感じられたと思っております。研究の成果を得たことは祝福されるべきことですが、私達が最も関心を払うべき対象は、そのプロセスにあると思っております。その知の創造のためのプロセスにおいて、問題の発見、解決および得られた成果の公表のための様々な知的活動が営まれたと思っております。そして、知識獲得および獲得した知識の活かし方はもちろんのこと、問題の捉え方、理解の仕方など、他者から学ぶべきことは数多くあったと思っております。今後、さらに、学び続ける際の参考になればと思ひまして、学ぶことについて、少し違った視点から、2つの事柄のお話をしたいと思います。一つは、私達の体の中の出来事と、もう一つは人類の歴史の始まりについてです。

まず、私達の細胞の中の出来事です。ミトコンドリアのことを覚えてますでしょうか。私達および真核生物（核がある生物）という私達の仲間の生物では全ての細胞にミトコンドリアが入っています。これは、極めて重要なもので、各細胞の中であって、エネルギー供給に関わっています。これが、なんと細菌由来のものだということです。10億年以上前に、あ

る細菌と単細胞の真核生物と共生して、新たな 1 つの生物となり、今の私達に繋がっています。2 つ目は、私たちの遺伝情報のお話です。ご存知のように、DNA の構造は 2 重らせん構造です。そのことが 1953 年に提唱され、その 50 年後の 2003 年に私達の遺伝情報の 1 セットであるヒトゲノムの解明が完了しました。そして、その後、様々なことが明らかになり、私達のゲノムが、実は、様々な他者から受けついだものであることが発見されました。その例として、母親の胎盤の話を取り上げてみましょう。胎盤は、赤ちゃんの最初の状態ともいえる胚と母親の間をつなぐための特殊な器官です。その重要なある部分についてですが、実は、脊椎動物の細胞には、元々それを作る能力がなく、私達の祖先の細胞に、ウィルスが感染したことによって可能になったのだそうです（フランク・ライアン著「破壊する創造者—ウィルスが人を進化させた—」早川書房）。つまり、私達は、様々な他者から得たものによって構成されていると言えます。そして、私達は、私達の敵であるウィルスからさえも貴重なものを得ていました。まさに、私達のからだの中でイノベーションが起きているとも言えます。それでも、私達は、生物学上のヒトです。だからこそ、人間として生き続けていることができているとも言えます。食欲に得て、得たものを活かす能力は大事であり、これは学びにおいても同様です。

次に、人類の歴史の出発点に目を転じましょう。このような生物的進化を基盤に、人はさらなる進化を遂げてきました。マクニールはその著「世界史」において、人の歴史の出発点を、まさに、文化によって進化が遂げられはじめた時としています。そして、私たちは、「人が社会の中で学んだものの力によってはるかに律せられるようになった」ことによって文化的に進化してきました。私たちは、社会の中で学び、成長してきたのです。灌漑治水事業など、大きな困難は、大きな知恵を生み出しました。そして、組織、制度を作り、個人では解決困難なことも、組織的な力で解決することができ、文明が発生しました。さて、社会の中で学ぶとは、どういうことでしょうか。それは、対話、交わりによる学びです。そのような学びは、日本でも古くから行われていたことが分かっています。16 世紀のフランシスコ・ザビエルがヨーロッパから海を渡って日本を訪れた際に母国に書簡を送っています。その中で、その頃の日本について「大変心のよい国民で、交わりかつ学ぶことを好む。」と書いていたそうです（村井章介著「世界史の中の戦国日本」ちくま学芸文庫）。当時の日本人も、交わり学び、異文化に触れたことでしょうか。皆さんも、生き生きとした姿を想像できるのではないのでしょうか。

一方、孤立してしまうとどうなるのでしょうか。孤立した状態の欠点の一例として、東洋史研究者であり、駐日アメリカ大使を務めたライシャワー氏は、その著書の中で、「孤立から生まれた過剰な自意識は欠点にもなり」、「外の世界に対して優越感か劣等感のいずれかに取りつかれているように見えること」があると述べています。（エドウィン・O・ライシャワー著「ライシャワーの日本史」講談社学芸文庫）。これを肝に銘じておくべきことと思います。私たちは、知識を得て、知恵を生み出し、それらをその時代の人達と共有し、次の世

代に繋げてきました。ある時は多様な価値観を認め合い、またある時は、自らの考え方や行動を改善することができます。つまり、孤立するのではなく、交わり、相互作用することによってこそ、自分を知ることができ、新たなより豊かな自分を作り上げることができます。今後の皆様の学術的、社会的な活動においても、豊かな文化的進化に貢献して下さることを期待します。

いま、本学が推進している「教育研究のインタラクティブ化」とは、まさに、様々な対話、交わり、相互作用を通じて、学びと研究を進化させることです。多様な対話、交わりを引き起こす学習環境、学習プログラムの整備及び研究活動を推進しています。昨年度は430名もの学生が海外研修を経験しました。多くの刺激を得たことで、考え方が変わり、行動が変わっていくことを期待しています。

変化を起こすのは、皆様のような若い方です。是非とも既成の分野にとらわれることなく、多様な分野の国内外の研究者、産業界の方々等との対話の機会を大事にし、貪欲に学び続けて頂きたいと思います。

最後となりましたが、九州工業大学に縁（えにし）があった方々の栄えある門出を心から祝福申し上げ、併せて御健勝と御多幸を祈念申し上げまして、告辞と致します。本日は、誠におめでとうございます。